SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

音楽アウトリーチ研究会によるコンサートの企画と実践：1年間の活動を振り返って

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部 公開日: 2013-04-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山下, 薫子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7145

音楽アウトリーチ研究会によるコンサートの企画と実践
――１年間の活動を振り返って――

代表者　山下　薫子（音楽教育講座）

平成 17 年度　静岡大学教育学部音楽アウトリーチ研究会　構成メンバー

松下允彦、根木真理子、大槻寛、柳沢信芳、北山敦康、宝福英樹、山下薫子（音楽教育講座）
伊藤真奈美、中村かおり、西山千賀子、村田美幸（大学院１年）
小野恵子、北田裕亮、志村朋子、高柳祥子、滝上裕美、田野倉恵、三浦正貴（音楽文化専攻４年）
成川真司、保坂朋子、山本菜美（音楽教育専修４年）
小柳津千恵、島袋哲治、津村美妃（音楽文化専攻３年）
池谷泉穂、土井恵、中村礼乃、藤村美雅（音楽教育専修３年）
池谷隼人、池田那美、内田紀恵、小酒井貴美子、田中智子、能條奏子、松沢佐希子、
山口眞輝、山田慎典、渡辺亜友美（音楽文化専攻２年）渡辺慶子（音楽教育専修２年）
秋山淑恵、伊東千明、金安悦子、下田太一、長澤歩弥、沼澤多栄子、村松絵理（音楽文化専攻１年）

１．研究会発足までの経緯

本稿は、平成 17 年 4 月に発足した「静岡大学教育学部音楽アウトリーチ研究会」の活動について報告するものである。音楽アウトリーチとは、「音楽および音楽教育の専門家等が、自ら地域社会等の中に入り、市民と双方向コミュニケーションを実現し、市民のニーズを汲み上げながら、市民に音楽の学習機会を提供すること」[1]を意味する。音楽を専門に学んでいる学生たちが、地域社会の中に出かけていき、聴き手の顔の見えるコンサートを企画・実行すること、言い換えれば、自らの「技」で真剣勝負をしながらニーズを把握する機会を得ることは、作曲・演奏活動の意味を考える上で、欠くことのできないプロセスである。

音楽教育講座では、平成 16 年 8 月、静岡音楽館ＡＯＩとの共催による「０歳からのクラシック」を皮切りに、学生を主体としたアウトリーチ活動を展開してきた。この一連の活動のなかで、音楽的技能の獲得のみならず、企画・実行力の育成の面でも大きな成果が得られることを実感し、今年度、新たに参加者を募って研究会を発足させた。組織は企画部門と演奏部門からなり、前者は研究会への参加を希望した学生有志、後者は有志の中でも特にオーディションに合格した者たちによって構成されている。企画部門の学生は、地域の文化施設から共催の依頼があったコンサートのうち、自分が担当する会の演奏曲目と演奏形態を考案し、演奏部門にリストアップされた演奏者（個人またはグループ）とそのレパートリー曲の表を参考にしながら、演奏者と曲目を決定してゆくのである。

---

[1] 文部科学省（http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/09/04091501/001/007.pdf）の「アウトリーチ活動」の概念規定を参考に、筆者（山下）が定義したもの。

2．活動の実際および企画担当学生の意見

（1）「市政教室～はじめてのクラシック～」8月3日（水）13：30～14：30、静岡音楽館AOI

【企画部門】

中村かおり、小柳津千恵

【演奏部門】

山田慎典（作曲）、中村かおり、土井恵、池谷泉穂、金安悦子、渡辺慶子（ピアノ）、田野倉恵（チェロ）、伊藤真奈美、津村美妃、能條奏子、島袋哲治、志村朋子、滝上裕美、小野恵子、北田裕亮（サクソフォン）、西山千賀子、村田美幸、池田那美、田中智子、内田紀恵（ソプラノ・司会）、三浦正貴（バリトン）

【プログラム】

作品発表〈life〉

第1部　《サウンド・オブ・ミュージック》より

〈サウンド・オブ・ミュージック〉〈私のお気に入り〉〈ひとりぼっちの羊飼い〉

〈ドレミのうた〈エーデルワイス〉〈さようなら、ごきげんよう〉

第2部　J. S. バッハ：《無伴奏チェロ組曲　第1番》より〈プレリュード〉（チェロ独奏）

F. シューベルト：〈アヴェ・マリア〉（ソプラノ独唱）

F. リスト：《パガニーニ大練習曲》より〈第6番　イ短調〉（ピアノ独奏）

J. ブラームス：《ハンガリー舞曲》より　第5番（サクソフォン四重奏）

【趣旨】

静岡市市政教室の一環。小学生と保護者を中心とした、親子で楽しめる音楽の場づくり。

【工夫点】

予ベルを鳴らさないことで、自然に音楽の世界に入っていけるよう試みた。また、“形態の対比”を行った。第1部では出演者全員が舞台に上がり、衣装を揃え、映画の雰囲気を再現した。また、作品中に全員参加の曲も用意し、振り付けをした。第2部では、耳にしたことがあるようなクラシックの名曲を演奏会形式で披露した。

【反省点】

連絡がうまく行き届かず、演奏者の方々に企画内容が直前まで伝えられなかった。リハーサルだけではなく、事前に企画内容を伝える場を持つべきだった。電話やメールでのやりとりはなるべく日程調整のみで使い、みんなで集まる場を増やすべきだと感じた。

中村かおり

（2）「神明大学」8月23日（火）9：30～10：30、清水袖師公民館

【企画部門】

山口眞輝、秋山淑恵、伊東千明、村松絵理

【演奏部門】

村田美幸、西山千賀子（ソプラノ独唱）、池田那美、田中智子、内田紀恵（女声アンサンブル）、

中村礼乃、藤村美雅（ソプラノ二重唱）、三浦正貴（バリトン）、滝上裕美、小野恵子（サクソフォン）、中村かおり、池谷隼人（ピアノ）

【プログラム】

〈夏の思い出〉（女声アンサンブル）／〈おぼろ月夜〉〈花〉（ソプラノ二重唱）

〈庭の千草〉〈さくら貝の歌〉〈椰子の実〉（ソプラノ独唱）／〈少年時代〉（ソプラノ二重唱）

〈上を向いて歩こう～見上げてごらん夜の星を〉（女声アンサンブル）

〈浜辺の歌〉〈城ヶ島の雨〉〈汚れた掌〉（バリトン独唱）

《日本の四季》より（サックス二重奏）

〈海〉〈からたちの花〉〈ねむの木の子守歌〉（ソプラノ独唱）／〈ふるさと〉（全員合唱）

アウトリーチ研究会発足第２回目の演奏会は、８月２３日（火）に清水区内にある袖師公民館にて行われた。これは、袖師公民館が「神明大学」という名称で開催している一連の講座の一環として企画されたものであった。神明大学は６５歳以上を対象として開かれており、毎回の講座の形式やそこで扱われる内容は様々である。そこで今回公民館から、第１部を歌中心の演奏会、第２部を宝福先生の講義とする２部構成の形で依頼を受けたというのが演奏会にいたる経緯である。

企画を担当したのは秋山、伊東、村松、山口の４人で、演奏会の企画立案は７月初旬ごろから始まった。最初の企画会議は７月７日（木）で、以降も基本的に木曜日に会議を行ったが、途中試験期間で動けない時期があったり４人全員が揃わないことが多かったりした。ただし、４人というのは他の演奏会の場合より比較的人数が多く、人数が多くなれば当然全員が顔を揃えるのは難しくなる。したがって全員が揃わないこと自体はある程度仕方のないことで、むしろ揃わないのなら揃わないなりに、その場にいる人間だけでもいかに企画を前に進めていくかということが実際的に重要だろう。その点では、初めから細かく仕事を分担していたわけではなかったため、誰か一人が会議に来ないためにある仕事だけが遅滞するという問題が起きなかったことは結果的に良かったと言えるだろう。ただ、これが例えば初めから企画担当者が２人だけだったとした場合には、一人が活動できなければもう一人が全ての仕事をこなさなければならず、非常に負担が大きくなってしまう。つまり人数が多くなればそれだけお互いをカバーしやすくなるが、やはり一つの仕事はなるべく同じ人間が継続的に取り組むのがよいので、その点においては逆に人数の多さがネックになる可能性もある。結局、演奏会の規模にもよるが、アウトリーチ研究会で手がけるような公民館での演奏会であれば３、４人が適当な人数ではないだろうか。

次にプログラムについては、まず公民館からの要望の通り演奏会全体のテーマとして歌を中心にした。また６５歳以上（最高齢では８０歳代の方もいた）というお客様の年齢層を考慮し、曲目を日本語の歌で統一することにした。これは当日取ったアンケートを見ればわかるが、お客様のニーズに応えるという意味において、大部分で成功したと思われる。人生の各時代でともに過ごしてきた、人それぞれに馴染み深い歌を集めたことや、知らないとしても歌詞が聞き取れるのでより鑑賞している実感が得られること等がその要因と考

えられる。ただ、これは逆に演奏者や企画者にとっては普段勉強している分野の音楽とは遠いということでもあり、それだけに苦労することも多かった。たとえば選曲についてはもともと日本語の曲に関して知識が少ないため勉強する必要があったし、演奏上でも普段歌い慣れているイタリア歌曲とは違う難しさがあったと思うが、今後につながる経験になったのではないかと思う。

プログラムで他に工夫した点を挙げると、歌が続いても飽きないよう、独唱だけでなく女声アンサンブル（三重唱）、ソプラノ二重唱を組み入れたり、演奏順も独唱をはさむ形で重唱を入れたりと、演奏会を通してメリハリがつくよう試みた。また声楽だけでなくサックス二重奏が入ったことで、今回のテーマである歌の世界をより広げることができた。そして全ての演奏が終わった最後に、お客様も含めて全員で「ふるさと」を合唱したのも音楽の醍醐味である一体感を感じてもらうのに効果的な企画だった。演奏する／鑑賞するという枠を超えて、一緒に音楽をつくるという参加型の企画はこれからも多く取り組んでいくのがよいと思う。

山口眞輝

（3）「附属養護学校高等部音楽発表会」9月22日（木）

【プログラム】

《サウンド・オブ・ミュージック》より

〈サウンド・オブ・ミュージック〉〈すべての山に登れ〉〈エーデルワイス〉〈ドレミの歌〉

チェロ：田野倉恵／ピアノ：小酒井貴美子

【概要】

高等部の生徒さんたち、教育実習生、そして先生方の演奏を鑑賞した後、ゲストとして２名の学生が演奏させていただいた。質が高く、なおかつ耳なじんだ曲を聴いていただこうと考え、《サウンド・オブ・ミュージック》から数曲を選曲した。そして、最後に演奏した〈ドレミの歌〉では、生徒さんたちはもとより、会場に集まった保護者の方たちもが、ともに口ずさんでくださった。

保護者のアンケートから、感想をいくつか引用してみよう。

「ゲストの演奏も素晴らしくて涙してしまいました…。」

「チェロとピアノ大変よかったです。落ち着いた音色なので、みんなじっくり聴けていたようで良かったです。」

「本物の演奏を身近で聴けて良かった。きれいな音色でしばし時を忘れた。子どもの心にもきれいな音色が残ったのでは…。」

演奏した学生は「生徒さんたちが、予想をはるかにこえて、静かにじっと耳を傾けてくれたので、驚き、そしてうれしかった」と感想をもらしている。音楽のもつ偉大な力を再確認したひと時であった。

（山下薫子）

（4）「静大生と楽しむクラシック」10月1日（土）14：00〜15：30、大里公民館

【企画部門】

成川真司、西山千賀子、志村朋子

【演奏部門】

三浦正貴（バリトン）、西山千賀子（ソプラノ）、高柳祥子（ピアノ）、田野倉恵（チェロ）、

【プログラム】

第1部　日本の歌、秋の歌

〈七つの子〉（チェロ独奏）／〈まちぼうけ〉（バリトン独唱）／

〈かやの木山の〉（ソプラノ独唱）／〈からたちの花〉（ピアノ独奏）

〈森の水車〉（ソプラノ・バリトン）

〈里の秋〉（バリトン・チェロ）／〈赤とんぼ〉（ソプラノ・チェロ）

〈「荒城の月」の主題による変奏曲〉（ピアノ独奏）

第2部　ピアノ連弾

〈エンターティナー〉〈タイプライター〉〈ワルツィング・キャット〉

〈シンコペーテッド・クロック〉〈カノン〉〈ハバネラ〉（オペラ《カルメン》より）

第3部　チャイコフスキー：《くるみ割り人形》（サクソフォン4重奏・ピアノ）

【来場者のアンケートを読んで】

このコンサートにおいて、会場のお客様にアンケートをとった。その内容を参考にして、今後の運営に向けた考察を行っていこう。

○年配の方々においては邦楽や昔の曲のほうが親しめそうな先入観があるが、アンケートの結果を見る上では「ジャズ」も評価が高い。

○「子どもをつれて気軽に聞きにゆける演奏会」というのは一つの有意義なコンセプトになるかもしれない。

○公民館の利用者の年齢層は50歳以上の年配の方かあるいは子供連れの30代のかたが主である。それを念頭において考えられる演奏会のコンセプトはどのようなものだろうか。

○子供連れの方々にも演奏会に足を運んでいただけるように気を配るのであればポスターやチラシにも「子連れ歓迎」のような触書を書いておいてもいいかもしれない。

○年配の方は若い年代の人と触れ合う機会を通してエネルギーをもらおうと考えている人も多いように思う。であれば、施設の慰問演奏（親しみのある曲をよく取り上げるようなもの）とは趣を異にしてみるのもよいかもしれない。

○演奏会は聞いているだけだと疲れてきてしまう。インスト（器楽）が続けば歌が聴きたくなるし、さらに続けば、演出がほしくなる。アンケートにも演出が好評だったという言葉は見られるのでなじみのない曲が連続しても楽しませる工夫は必要であるように思う。

○学生が企画・運営・演奏するという「学生主体のコンサート」に対して、お客様からの反応は非常によかった。実際に「好感が持てる」といった意見もあった。これは、我々がこれからも積極的に、幅広い活動に取り組んでいく意義があることを示唆しているといえる。しかし、学生だからということに甘えていては、こうした演奏会の継続には限界があると思われ

る。企画も演奏者も演奏会に関わるすべてのスタッフが、1つ1つの行程に妥協せず取り組んでいくことが重要である。

成川真司、西山千賀子、志村朋子

（5）「0歳から聴くクラシックコンサート」11月27日（日）10：30〜11：20、北部公民館

【企画部門】

小酒井貴美子、保坂朋子、山本菜美

【演奏部門】

山田慎典（作曲）、中村かおり、渡辺亜友美、高柳祥子、土井恵、池谷泉穂（ピアノ）内田紀恵、田中智子、池田那美、松沢佐希子（ソプラノ）、田野倉恵（チェロ）、伊藤真奈美、小野恵子、滝上裕美、津村美妃、池谷隼人、志村朋子、能條奏子、北田裕亮、長澤歩弥（サクソフォン）

【プログラム】

〈life〉〈waltz〉（作品発表）

モーツァルト：《フィガロの結婚》より〈手紙の二重唱〉

《コジ・ファン・トゥッテ》より〈ねぇ、ちょっと見て〉（ソプラノ二重唱）

〈夕焼小焼〉〈ちいさい秋見つけた〉ボッケリーニ：〈ロンド〉（チェロ独奏）

《動物の謝肉祭》より〈白鳥〉〈フィナーレ〉（ピアノ連弾）

〈もみじ〉〈旅愁〉〈赤とんぼ〉〈大きな栗の木の下で〉（女声アンサンブル）

ハチャトゥリアン：組曲《ガイーヌ》より〈剣の舞〉（ハチャトゥリアン）

J. S. バッハ：〈主よ人の望みの喜びよ〉／エルガー：〈威風堂々〉（サクソフォン九重奏）

今回のコンサートでは0歳からの子供とその保護者を対象とし企画を行った。様々なことに対し多感な子供にとって生の音楽を聴くということは大変重要なことである。しかしながらそういった小さい子供を持つ親にとって「クラッシクコンサートを聴きに行く」ということはなかなか大変で勇気のいることだ。なぜなら「クラシックコンサート」と言うと静かで堅苦しいというイメージが強いからである。特に、子供が演奏中に大きな声を出したりして他のお客さんたちに迷惑をかけては申し訳ないという気持ちがあるため余計に出向きにくくなってしまう。しかし、対象者を「0歳から」と明確にすることにより子供が演奏中に大きな声を出したり動き回ったりしてもお互い様といった気持ちで気軽に参加してもらえるだろうと考えた。

また、客席に椅子だけでなく絨毯も用意し出来る限り子供たちにとって落ち着きやすい空間作りを行った。次にプログラムについてであるが、モーツァルトやバッハなどと言ったクラシック音楽に加え日本の童謡も組み込んで構成を行った。これまでのコンサートで回収したアンケートの中に「皆が知っているような音楽を聴きたい。」と言う意見がいくつかあった。その意見を参考にすると同時に、このコンサートを行う季節が秋であるということも考慮して「もみじ」などといった童謡をいくつか取り入れた。やはりよく知られた曲が演奏される

時には保護者の方たちも口ずさむなどして楽しんでいたように思う。

ただ、今回のコンサートのアンケートの中にも「曲が難しすぎる」という意見がまだまだあった。企画側としてはそう言ったことに気を付けて選曲を行ったつもりではあったが、まだまだ聴きに来てくださる方々のニーズを理解し切れていないと感じた。これは大変難しいことではあるが、演奏会のアンケートなどを参考にして勉強していきたい。

演奏会では、子供たちが飽きてしまわないように楽器も出来るだけ偏らないように心がけ、ピアノ、歌、チェロ、サックス、トーンチャイムを用いた。ピアノでも独奏と連弾の両方で演奏を行ったり、歌では２重唱とアンサンブルで演奏を行った。様々な楽器を視覚的にも聴覚的にも楽しみ興味を引き付けることが出来たように思う。また演奏会の中に手遊び歌を交え、出演者と一緒に口ずさみながら体を動かして参加することで演奏会や演奏者をより身近に感じてもらうことが出来たのではないだろうか。「クラシックコンサート」と言っても堅苦しいものだけではないということを理解してもらうと同時にこれまでの先入観をなくしてもらうためにもこれらは大変良かったと思う。

写真：手遊び歌の演奏（撮影：橋戸秀幸氏）

今回コンサートを企画し運営することでこれからの課題がたくさん見つかったように感じる。例えば、企画者と出演者との意見交換をもっと密に行い演奏会を作り上げるべきだということである。企画者側はコンサートの趣旨や工夫点を理解していても演奏者がきちんと理解していなくては意味がない。また、なぜその曲を選曲しプログラムを構成したかもお互いが理解すべきだと思った。企画者側も演奏者側も納得した上で演奏会が行われることが何よりも重要と言えるだろう。

先ほども述べたように、聴きにきてくださる方々の求める音楽がどういったものなのかを理解することも大切なことである。これはアンケートなどによって得ると同時に子供向けのテレビ番組などからも得ることが出来るであろう。企画側、演奏者そして聴き手の求める音楽が一致することが望ましいがそれは大変困難だ。これをどう考えていくかがこれからの課題と言える。ひとつ残念であったことは、裏方に人数が少なかったために企画者が本番に会場のお客さんたちの反応や様子をあまり見ることが出来なかったことである。今回のコンサートでの反省点を生かしこれからの演奏会に生かしていきたいと思う。

小酒井貴美子、保坂朋子、山本菜美

（６）「来てこ de クリスマス」12 月 17 日（土）健康文化交流館「来・て・こ」

【企画部門】

西山千賀子・秋山淑恵・伊東千明

【演奏部門】

中村かおり、小酒井貴美子、渡辺慶子（ピアノ）、伊藤真奈美、津村美妃（サクソフォン）、池田那美、内田紀恵、田中智子（ソプラノ）、伊東千明（指揮）、秋山淑恵、池田那美、内田紀恵、大庭郁穂、小酒井貴美子、田中智子、中村かおり、山口眞輝（トーンチャイム）

写真：トーンチャイム演奏（撮影：山下薫子）

【プログラム】（同じプログラムで2回公演した）

〈ジングルベル〉（ピアノ）

グノー：〈アヴェ・マリア〉（サクソフォン）

〈サンタが街にやってくる〉〈Ave verum〉〈あら野のはてに〉（三重唱）／〈聖しこの夜〉（ピアノ）

〈We Wish You A Merry Christmas〉〈アヴェ・マリア〉（アルカデルタ）〈ひいらぎ飾ろう〉

〈諸人こぞりて〉〈ホワイトクリスマス〉（トーンチャイム）

【趣旨】

イベントの対象である、子どもからお年寄りまでの幅広い年齢層に受け入れていただけるような音楽を提供する。

【工夫した点】

テレビCMで使われた曲や、クリスマスの時期に街で流れる親しみやすい曲を選曲した。また、子供たちにも興味を持ってもらえるようピアノ、サックス、三重唱、トーンチャイムといったさまざまな楽器を使用した。

【反省点】

企画者と演奏者との連絡の取り合いがなかなかうまくいかなかった。

来・て・こ deクリスマスというイベントの中の一つだったからか、お客様があまり集まらなかった。

【改善したい点】

企画者が演奏者への情報提供を迅速にするのは改善すべき点だが、演奏者もわからない点や気づいた点などがあったときになるべく早く企画者に聞いてほしかった。このことから、演奏者と企画者との話し合いの機会を増やしていくことや、演奏者もプログラムなどを企画する段階から出来るだけ参加していくことなどが、今後の課題といえる。

秋山淑恵、伊東千明

（7）「気軽に楽しむクラシック」平成18年2月26日（日）13：30〜14：30、長田公民館

【企画部門】

小柳津千恵、中村かおり

【演奏部門】

西山千賀子、村田美幸、池田那美、内田紀恵、田中智子（ソプラノ）、池谷隼人、池谷泉穂、金安悦子、下田太一（ピアノ）山田愼典（作曲）

【プログラム】

第１部　ミュージカル《サウンド・オブ・ミュージック》より

〈サウンド・オブ・ミュージック〉〈私のお気に入り〉

〈ひとりぼっちの羊飼い〉〈ドレミのうた〉〈エーデルワイス〉

〈さようなら、ごきげんよう〉

第２部　作品発表　〈疵〉

W. A. モーツァルト生誕 250 年を記念して

モーツァルト：オペラ《フィガロの結婚》より〈けんか〉の二重唱

アリア〈恋とはどんなものかしら〉

モーツァルト：交響曲 第 40 番 ト短調 より 第１楽章・第４楽章

【感想】

当日は、年配のお客様が多かったため、選曲が適当だったかどうか、最初は不安に感じた。しかし、《サウンド・オブ・ミュージック》は、意外にも年配の方に親しみやすい内容だったようだ。日本語の歌詞を用いて演奏したため、楽しんでいただけたのだと思う。アンケートにもわかりやすくてよかった、という意見が多かった。

反省点としては、演奏者の創意工夫に任せた部分が多かったということである。ピアノの人にアレンジをしてもらったり、楽譜にない旋律を挿入してもらったりした。結果的には成功したが、演奏しやすい楽譜を早めに用意できれば、演奏者に負担をかけずに済んだだろう。

小柳津千恵

３．演奏に参加した学生の感想

（１）演奏の場を設けてくださりありがとうございました。人の前に立つということは、完成度が問われるということなど、日頃の練習では学べないことを多く実感しました。この経験を生かして精進していきたいです。(藤村美雅)

アウトリーチでは、聴いてくれる人の事を考えて曲を選びました。演奏会では、自然とお客さんが一緒に歌を口ずさんでくれました。演奏者とお客さんが一体となって作り上げる音楽は素晴らしいなと感じました。(中村礼乃)

（２）アウトリーチに参加し、先輩方と練習や本番を一緒にさせて頂いた事で、得るものが多くいい経験となりました。楽譜はきちんと歌用で、できれば三重唱用のものを頂けたほうがこちらとしてはうれしかったです。しかしそれについても、メンバーで歌について様々なことを考えることが出来た、という点では、非常に勉強になりました。練習においては、

与えられたものをただこなすだけであったので、もっと表現できるよう練習をするべきだと感じました。あと、一番初めにアウトリーチのメンバーが決まったら、顔合わせのようなものを全員でやると、どんな方が関わっているのかがきちんと分かっていいと思います。意見が多くなってしまいましたが、一年間ありがとうございました。(池田那美・内田紀恵・田中智子・松沢佐希子・渡辺亜友美)

(3) 私は三回のアウトリーチに参加し、自作曲を三曲発表した。作曲を勉強する私にとって発表の場がある事は大切であり、自分自身の現在の能力を客観的に見る事の出来る重要な場である。また私がどのように音楽を捉えているか、どのような影響を受けているかを知っていただける場でもある。私にとって発表するという事は緊張と集中によって創作する事ができ、技術向上に繋がり、そして何を書きたいかが明確になる事だった。また、発表するとなればより面白い内容の物を書こうと試行錯誤し、演奏家の方に弾いていただく為に自分の感情を伝える譜面の書き方も考えるようになる。そうして現在自分が求めている音や表現の仕方、自分のスタイルを模索し見つけていくのだと思う。また、必要な物が見えて取り入れようとする。これが私にとってのアウトリーチだった。自分の音楽を多くの人に聴いていただけるって有難い事ですね。(山田愼典)

(4) 私達は、伴奏と連弾で出演しました。最初の伴奏の時には、歌やチェロの方と合わせる時間がなかなか取れず苦労しました。しかし、少ない時間だからこそ集中して取り組もうと必死だったと思います。2回目に出演した連弾では、個人個人の未熟さを実感しました。また、2人で合わせることに一生懸命になってしまってお客様に聴いてもらっているという意識が薄かった気がします。でも、2回の本番は楽しかったし、いろいろな共演者の方との交流もあって良かったです。(池谷泉穂・土井恵)

4. 公民館職員の方の所見および来場者の皆さんの感想

(1) 谷澤真実氏(大里公民館)所見より

地域でのコンサートであり、コンサートホールでの演奏会よりはラフな形で実施をしたため、小さなお子さん連れの家族も何組かいた。幼いうちから音楽に触れることは、子どもの感性を育てるにあたって、とても良いことだと考えているので、ルールを守って、楽しく鑑賞することができて良かった。また、クラシックと言うと、難しいと感じられる方も多いと聞くが、今回は、子どもも知っている童謡から、本格的

写真:小劇をまじえた演奏(撮影:山下薫子)

なクラシックの曲まで、幅広く演奏をしてくれたため、親しみやすかったようである。

1時間30分という、お子さんにとっては集中力が切れてしまう、長い時間の演奏会だったが、演奏中に小劇を混ぜる等、とても楽しい内容であったので、和やかな雰囲気で大人も子どもも楽しく鑑賞できた。(中略)

研究会の皆様には、学生さんならではの、どの世代の方にも受け入れられるアイデアを盛り込んでいただき、楽しい演奏会を開くことができた。世代間での交流が不足していると言われる現代、今回のように音楽を通しての交流はとても大切であると考える。またこのような機会を、是非とも設けていきたい。

(2) 来場者の感想(清水袖師公民館)

・清潔な学生さんたちの熱意、本格的な歌曲、乙女時代を想い出しました(89歳女性)。

・皆知っている歌ばかりでなつかしかったです。日本のうたは何時間聞いても良いと思います。今でも詠いたいと思って居ります。「見上げてごらん夜の星」涙が出てきました。若い学生さんで、声がはつらつとして、感動しました。音楽を専攻に学ぶこと、羨ましく思いました。頑張って下さい。「ふるさと」を歌う時は、若い皆様につられて、一緒にいつになく歌ってしまいました(76歳、女性)。

・生の声、ピアノ演奏を聞き、見てうれしかった。「ふるさと」は老人ですので高かった。サックスって何だろうと思いましたが、楽器でした(83歳、女性)。

・病人の介護であまりに忙しく、神明大学の出席にこだわって今日のテーマを忘れていましたが、「来て良かった。」今日はとってもラッキーな気分で一日すごされます。有難う御座居ました(75歳、女性)。

・本日の選曲がよかった。「生」は素晴らしい。若いエネルギーをありがとうございました(75歳、男性)。

・「ふるさと」以外、老人と一緒に皆で歌う歌を、あと2曲くらい取り入れてほしい(72歳、男性)。

③来場者の感想(北部公民館)

・どれも良かったです。女声アンサンブルも聴いたことが無かったのですが、いいものだなぁと思いました。童謡、特に「大きな栗の木の下で」は1歳10ヶ月の子どもも楽しんでいました。親子とも楽しめた良いプログラムでした。

・普段、チェロが聴き慣れていないので新鮮でよかった。サクソフォンは迫力がありよかった。後はどうしても子供があきてしまう。それでも耳に入ってくるので良いと思います。何より親のストレス解消・リラックスできました。

・子どもがうるさくしている中、皆さん清楚で礼儀正しく演奏していただき、とても気持ちよく楽しめました。

・出演者のレベルは、かなり高かったと思いますが、聴く側のレベルが子どもとなると、選曲をもう少し難易度を下げた方が聴き易かったかな。

・以前来た時より華やかになってよかったです。学生らしく好感も持てるのですが、音楽の楽しさを伝えてくれるような明るい表情での演奏・楽しい雰囲気など、子どもたちに語りかける優しい表現の司会にしてくれたら、子どももももう少し引き込まれるかも…演奏がとてもよかったので、NHK の「おかあさんといっしょ」など参考にして、雰囲気作りをがんばってほしい。

5．教員の意見

（1）アウトリーチ研究会の活動を見てきて　　松下　允彦

１年間、アウトリーチのコンサート活動を見てきて、学生の成長に目を見張るものがあったことを演奏者・企画・観客および主催者の観点から報告する。

演奏者：オーディションで受かったものに演奏機会が与えられたわけだが、やはり演奏に真剣に取り組む姿が見られ、とても良かったと思う。また選ばれた演奏者は回を重ねるにしたがい観客との息が合ってきて“自分を表現する意味”が解ってきたように伺える。これは当初のねらいがそこにあったので、出演者のメリットは計り知れない。

企画：将来教師を目指す学生にコンサートを企画運営する経験を持たせる目的があったわけだが、回を追うごとに進歩したと言える。特に企画ごとの観客層に応じたプログラムや司会など、想像を超えるものであった。

観客：老人層とか幼児連れといったようにその都度違っていたが、どこの会場も盛況であった。アンケートを読ませて頂いても、今後を期待する内容や学生を励ます内容であふれているようだった。聞いて頂けた皆様には充分満足して頂けたのではないかと思う。

主催：主催は公民館とアウトリーチの共催だが、実質的には公民館からの依頼である。その公民館側から大変喜ばれ、次年度の依頼が増える気配があることからもこの活動の必要性がうかがえる。

（2）アウトリーチ活動の成果と課題　　大槻　寛

学内の通常授業や期末試験で行われる音楽学習や演奏発表・作品発表は、ある程度固定化されたアカデミック評価を獲得するために行われやすい傾向がある。一方、もっぱら芸術発表の場としてある演奏ホールや劇場での商業的芸術活動への参加は、費用や技量の点から静岡大学学生にとっては日常行いにくい世界である。本学のアウトリーチ活動によって、特に商業的なマネージメントでなく一般的な人々や、子供達、或いは親子の集まりやすい環境へ出前演奏会や社会施設等への安価で非商業的マネージメントによる音楽文化が普及し歓迎されることは、音楽学生にとってもそれなりに生きた学習発表の場が得られる。身内の関係者による、狭い評価基準での音楽学習とは異なる刺激や喜びを得られる。それと同時に高価な商業的芸術演奏文化を享受しにくい社会階層の人々へ有る程度良質な芸術文化を普及することになっている。実際、この活動への作品発表が大きな要因となって私個人の指導学生の一

人は、学習意欲がそれまでとは異なり大幅に増進した。またそこでのアンケート調査や学生相互の評価から通常の学内授業では得られにくい学習目的の再発見や深化が見られた。希望される演目への手持ち楽器対応編曲などが生きた作曲学習にもなっている。これらは通常の学内授業でも全く不可能という訳ではないが、協働の精神高揚に大いに役立っている。

しかしながら、学生派遣を望まれる社会施設や団体・学校等と学生派遣を円滑に行うためにはマネージメント教員の労力が膨大であり、教育労働としての価値評価を早急に高めなければ成り立たない。また受け入れ側の希望する演目やスタイルにのみ合わせての活動になりやすく、親しみやすく且つ質の高い音楽芸術の普及を目指すと言うことが容易なことではなく最も高いレベルのプロ根性を要求されるものであるということである。

（3）アウトリーチの指導に当たって　　柳沢　信芳

クリスマスコンサート（2004 年 12 月 18 日、来てこホール）に柳沢研究室の学生が参加することになり、夏休みをかけて曲目の構想を練るように学生に指導した。後学期も中盤に差し掛かり、クリスマスを迎える時期でのアウトリーチ演奏会ということで、学生たちも意気込みを持って用意に取りかかっていた。授業の流れから、曲目は古典派、ロマン派の作品から選んで演奏研究を行うこととなった。

この演奏会の問題として、曲目をクリスマスにちなんだものにしてほしい、という要望があったが演奏会間近であったため変更はせずに行った。このことは以後の課題となった。

学生の意識には演奏日が近づくにつれて緊張感と、ステージに向けての意識が高まり、集中して練習に取り組み、授業に臨む姿がうかがえた。しかし、１１月は静大祭があり、学生の意気込みに中断が見られたものの、それが終わると再び仕上げに向けて頑張っていた。

一方、聴衆は子供連れの母親や熟年者が多かった。プログラムの解説を読みながら聞き入っている様子に関心度の高さが感じられた。また、熱心に聞き入っている一般の聴衆の姿から、音楽の享受の様子をうかがい知ることができ有意義なクリスマスコンサートであったと思う。

アウトリーチの発表を終えて、その後の経過をみると、学生一人一人の演奏に対する向上心の高まりが感じられ、日ごろの練習にも変化がみられた。

関係者の皆様のご尽力でコンサートができたことに感謝したい。

（4）アウトリーチ活動の成果と課題　　北山　敦康

私の研究室では、主に芸術文化課程音楽文化専攻の学生によるサクソフォンアンサンブルでアウトリーチ活動に参加しました。とくに、公民館等でのサクソフォン四重奏による演奏参加は、日常的に芸術作品を中心に練習している学生たちにとって、小品やポピュラー音楽まで作品のレパートリを拡大する大変良い機会になりました。さらに、ステージと客席との距離が心理的にも近いこの種の演奏経験は、聴衆に喜んでもらうことを意識して練習すると

いう演奏の本質的な喜びを体験し、練習への能動的な動機づけとしても得難いものでした。

このような成果を得ることができたのは、何よりも学生たちが自らの専門領域に対して自信と誇りを持って参加できたからにほかなりません。こうした活動の基盤は、教育学部の専門性が、学校教員の養成という側面だけでなく、地域文化の醸成や生涯学習を視野に入れた社会教育までを広くカバーしていることで成り立っています。私たち教員にとって、アウトリーチ活動の成果が示唆するものは、教育学部の社会的責任のバランスシートのようなものなのかもしれません。

（5）アウトリーチ活動の成果と課題　　宝福　英樹

アウトリーチ活動を通して、学生の自主性と潜在能力の面で大いに目を見張るものがあった。この活動以前の学生の研究姿勢は、教員側からの研究課題の提供を待ち、それをこなして行くという消極的で、かなり受け身の態度が見受けられた。しかし、この活動に関わってからの彼らのそれは、自ら研究課題を見つけ、それに邁進し、研究して行くという積極的な研究態度に転じた。その結果、研究課題に対し、自ら責任を持ち、細部に渡り創意工夫が見られ、独自の意見を反映させるというプラス方向の成果が見られるようになった。また潜在能力において、別の一面を垣間見ることが出来た。普段の学生との会話等では分からなかった文章能力や発表能力（プレゼンテーションやパフォーマンス）などに才能があることが判明し、これにはやや驚かされた。これからの研究に、今までとは異なる面からのアプローチも期待できると思っている。

ただ、全てにおいて、プラス面ばかりかというとそうではなく、問題点もある。研究の基礎的なことを学ぶ時期である学生のアウトリーチでの活動課題が、それと直接的に結びつかない場合である。発表するということは、とても有意義であり、普段の研究の何倍もの成果が得られると考えられるが、その学生が、その時点で持っている技術面や精神面での許容量を超える場合は、それにやや差し支えるものと思われる。今後の課題としては、その時点の実力とアウトリーチ活動で提供するものの折り合いを考えるということが必要かと思われる。

6．おわりに

地域文化施設との協働で展開してきたアウトリーチ研究会は、おおむね好評のうちに1年間の活動を終えることができた。様々な機関に属し、様々な立場にある人々が、協働して1つのコンサートをつくり上げるというプロセスにおいては、単独ではなしえない大きな成果が期待される。すでに本講座には来年度の演奏依頼が複数届いている。2年間の成果と課題を次に活かし、気持ちを新たに活動に取り組んでいきたい。

本研究会の活動は、地域文化施設の協力なくして成立し得ないものである。研究会の趣旨を理解し、学生たちを温かく導いてくださった文化施設の職員の方々に、この場を借りて心から感謝申し上げたい。ありがとうございました。